

音楽から受ける印象—それは人それぞれだろう。世の中には数えきれない曲がある。その出会いの中で好んで選ぶ音楽、その選択は様々だ。同じ曲でも演奏者によって、歌い手によって、演出によって毎回様々な顔を見せる。何ひとつ同じものはない。だから感動したり、つまらなかつたり様々な印象を持つ。その印象は与える側ばかりでなく、受け取る側がどんな年代で、どんな日常を送っているかの問題もあるだろう。でも本当に素晴らしいものは、その現実感覚を超越してしまうものだろう。

私もコンサートに行けば、それぞれに心地よい余韻を抱いて帰るのであるが、ふと思い返してみると3つだけ特に印象に残っているものがある。

まずは、小澤征爾指揮・新日本フィルハーモニー交響楽団演奏、オリヴィエ・メシアン作・歌劇「アッシジの聖フランシスコ」より3景（於：東京カテドラルマリア大聖堂）だ。これは[オラトリオ上演・日本初演]ということで、メシアンご夫妻の挨拶があった。武満徹さんも聴きにいらしていた。「教会」という会場が初めての私は、演奏が始まった途端、コンクリートの壁に当たって中央で交差する音の強い反響に一瞬戸惑ったが、それも少しすると落ち着いた。「始め良ければ終わり良し」ではないが、私のコンサートの印象は殆ど出だしで決まる。出だしが受け入れられれば最後は問題なく収まる。そしてこのコンサートで私に「クラッ」と心地よい目まいを与えたのは、頭上のバルコニーから聞こえたソプラノだった。あれは天使の声？私の意識は穏やかに輝く光りの世界に導かれた。歌い手は伊藤叔さんだった。それから長年過ぎたある日、いきなりその印象が甦り、またあの声を聴きたいと強く思ったが、残念ながらその1か月前に鬼籍に入られていた。あの声は私にとっていまだに「天使の声」である。

次もまた小澤征爾さんのものである。というのは私の小学生時代の音楽教育は「カラヤンが世界の最高峰」だったので、私の感覚の基本はそこにある。小澤さんがカラヤン氏の弟子というわけではないが、私が当時「堅苦しくなく退屈ではない」と抵抗なく受け入れることができた日本のクラシック音楽は「新しさに挑戦する小澤征爾&新日フィル」だったのだ。そんなある日、チケット・ピアの前を通りかかった時、小澤さんの本拠地であった「ボストン・フィル残席1枚」という垂れ幕が目に入った。「チャンス！」残っていたS席1枚をゲットした。そのコンサートで私は「クラッ」ではなく「ふわっ」ときた。私は会場ではいつも、それぞれの楽器の音、コーラスであれば一つの声を出して個別に楽しんでいるのであるが、その演奏の終盤、音が一つに溶け合っって個別の音が聴き分けられなくなった。「あれっ？」私は「頭がボーっとしちやったのかしら？」と体勢を立て直したが、やはり音は融合している。「オーケストラがひとつになった！」と感じた非現実的空間だった。

最後に、ウィーン・フィルのメンバーによる2011ニューイヤー・コンサート(於：サントリーホール)でのこと。レハールの「メリー・ウイドウ」から愛のワルツ「ときめく心に唇は黙し」この作品内容については某音楽家が「イヤラシイ」と言ったのが変に心に残っていたが、この演奏を聴いて私の印象は「恋とは美しいもの」に即変換した。「なんて美しい音楽なんだろう」それはおそらくウィーン楽器特有の音色にも由来すると思う。このときも「クラッ」ではなく「ふわっ」であった。私の意識の中で、オーケストラの中央に、貴族の舞踏会の様子が出現した瞬間だった。(2012.5.26)